

オーラル・ヒストリーの実践と 同時代史研究への挑戦

——吉沢南の仕事を手がかりに

大門 正克

はじめに

- 1 吉沢南の仕事——『私たちの中のアジアの戦争』
- 2 1980年代後半における歴史学とオーラル・ヒストリー
- 3 2000年代における歴史学とオーラル・ヒストリー

おわりに

はじめに

歴史学におけるオーラル・ヒストリーは、大別して二つの分野をもっている。

一つは政治家を中心にした「公人」へのオーラル・ヒストリーであり、行政文書や日記などからはわからない政治的諸関係や政策意図を探るものであり、政治史研究・政策研究の一環をなしている。もう一つは、いわゆる民衆を対象にしたオーラル・ヒストリーであり、文字を残すことが少ない人びとや文字を残すことが難しい場面に遭遇した人びとを対象にしている。

民衆から聞いた話しを文字にすること（聞き取り、聞き書き）は、民俗学や文化人類学の領域で以前から行われてきた。歴史学でも一九七〇年ころからの民衆史研究の台頭のなかで、聞き取りが行われるようになった。そこでは、豊富な聞き取りを駆使した中村政則『労働者と農民』（小学館、1976年）のような作品も登場した。こうした研究をふまえて、1980年代以降になると、歴史学の方法としてオーラル・ヒストリー（聞き取り）が議論されるようになった。

民衆を対象にした歴史学のオーラル・ヒストリーについて考えるために、ここでは1980年代から1990年代に至る吉沢南の仕事振り返ってみたい。ベトナムや中国の現代史研究で知られた吉沢は、民衆の戦争体験を明らかにするためにオーラル・ヒストリーに並々ならぬ関心もち、それを実践した。このことは一部の人びとに注目されていたが、吉沢の仕事が途絶えたこともあって、あまり注目されることなく今に至っている^①。吉沢は、自らが関心を抱いたオーラル・ヒストリーを歴史

(1) あとでとりあげる吉沢のオーラル・ヒストリーの作品（吉沢1986b）については、管見の限りで（笠原1988）と（吉田1988）がとりあげているが、オーラル・ヒストリーに関する吉沢の仕事については、未検討のまま残されている。

学の方法として打ち立てるために苦闘（あえて苦闘という）していた。それは同時代史研究への挑戦にほかならなかった。吉沢の苦闘には今でも振り返るべき点が多い。手がかりの少なかった1980年代に吉沢はなぜオーラル・ヒストリーという方法にこだわったのか、吉沢が考えたオーラル・ヒストリーの方法とは何であったのか。オーラル・ヒストリーをめぐる吉沢の格闘を通じて、歴史学とオーラル・ヒストリーのかかわりについて考えることがここでの課題である。

1 吉沢南の仕事——『私たちの中のアジアの戦争』

歴史学研究会が発行する『歴史学研究』には、オーラル・ヒストリーに関する特集が2回組まれている。1回目は1987年6月号（第568号）であり、「特集 オーラル・ヒストリー——その意味と方法と現在」が掲載されている。2回目は2006年2月号（第811号）と4月号（第813号）であり、「小特集 方法としての『オーラル・ヒストリー』再考」が組まれている。2回目の小特集は、歴史学研究会の主催で2005年4月3日に開かれたシンポジウム〈「方法としての「オーラル・ヒストリー」再考」〉をもとにしており、当日私はコメントを求められてシンポジウムに参加した⁽²⁾。

コメントを準備する過程で私は、1980年代以降における歴史学や社会学のオーラル・ヒストリーに関するとりくみを振り返った。『歴史学研究』の1回目の特集は、「シンポジウム オーラル・ヒストリー」と「座談会Ⅰ 『妻たちの二・二六事件』から『記録 ミッドウエー海戦』まで——澤地久枝氏をかこんで」、 「座談会Ⅱ ニューギニア高地から南京へ——本多勝一氏をかこんで」の3つの企画で構成されている。後2者は、その後、歴史学研究会編『オーラル・ヒストリーと体験史——本多勝一の仕事をめぐる』、同編『事実の検証とオーラル・ヒストリー——澤地久枝の仕事をめぐる』としてまとめられ、いずれも1988年に青木書店から発刊された。

歴史学研究会の1回目の特集と2冊の本の編集を中心的に担ったのは、1983年から1985年にかけて歴史学研究会の委員をつとめていた吉沢南であった。吉沢がこれらの企画にかかわっていたことは知っていたが、これらの企画を再読するなかでオーラル・ヒストリーに対する吉沢の関心の強さをあらためて知った。今回、私が吉沢の仕事振り返ることにした直接のきっかけは、このときの再読にある。

オーラル・ヒストリーに関する吉沢の仕事は、吉沢の『私たちの中のアジアの戦争——仏領インドシナの「日本人」』（1986年）にまとめられている。この本に至る吉沢の仕事のプロセスを簡単にまとめておく⁽³⁾。

1978年から1980年の2年間、ハノイに滞在した吉沢は、ランソンとドーソンを訪れた（吉沢1986a：248）。吉沢がランソンを訪ねたのは1979年4月12日。それに先立つ2月中旬には、中国軍がベトナムに進攻し、ランソンの街は中国軍によって徹底的に破壊しつくされた。瓦礫の街を案内された吉沢は、街のなかのある建物にかつて日本軍の司令部があったことを教えられる。ドーソン

(2) 当日の私のコメントは、(大門2006)を参照のこと。このコメントについては後述する。

(3) 本稿に関連する吉沢南の著作については、本稿の最後に掲げた「参考文献」を参照のこと。なお、吉沢の著作については、(青山和夫編2003)を参照した。

も日本軍がベトナムに踏み入れた地であり、そのことを吉沢はあとで知る。ランソンの瓦礫の街の「光景と日本軍のランソン攻撃とが二重映しになってしまった」吉沢は、このときの体験をきっかけとして、帰国後の1980年から外交資料館や防衛庁防衛研修所の図書館などをまわり、ベトナムにおける日本軍について文献資料の調査・研究を始めた。

1983年末、吉沢は調査・研究の成果として、ある研究会でハノイにおける日本軍（西原機関）について報告をした（吉沢1986b：3）。その研究会に出席していた人から西原機関の関係者を紹介してもらった吉沢は、同年末にその関係者を訪ねて聞き取りを開始した。吉沢の聞き取りは、「私たちの中のアジアの戦争——日本とベトナムのあいだ」と題して、東京大学出版会の月刊誌『UP』に1984年7月から1986年3月まで14回連載された。また文献資料にもとづく研究は、「ハノイにおける西原機関——1940年7月」として1984年に発表されている（吉沢1984）。吉沢自身の言葉によれば、「いわゆる“大東亜戦争”時期ベトナムに侵略した日本軍」（吉沢1986b：3）に関する研究は、文献資料と聞き取りの2つの方法によって進められ、その成果は1986年に2つの著作として発表された。文献資料の成果が『戦争拡大の構図——日本軍の「仏印進駐」』（吉沢1986a）であり、聞き取りにもとづく成果が先に掲げた『私たちの中のアジアの戦争』である。

歴史学研究会のオーラル・ヒストリーに関する1回目の特集は1987年のことだったので、吉沢はそれまでの自分自身の聞き取りの体験をふまえて特集にとりくんだことになる。吉沢はその後、聞き取りを通じて知った「キムソン村襲撃事件」についてベトナムで調査を行い、調査結果と聞き取りで知ったことを照合した『ベトナムの日本軍』（吉沢1993）を著したが、その後は聞き取りに関する著作をまとめることがなかった。そこでここでは、『私たちの中のアジアの戦争』を中心において、1980年代初頭から1990年代前半までの吉沢がどのような問題関心と方法にもとづいて聞き取りを行ったのかについてまとめてみることにしたい。

（1）現代史研究の固有の方法をめぐって

1980年代に入り、新たに「いわゆる“大東亜戦争”時期ベトナムに侵略した日本軍」の研究を始めるにあたって、吉沢は、「現代史研究の固有の方法」を強く意識するようになった（吉沢1986a：252、傍点—原文）。ここでのポイントは2つあった。1つは既存の文献のみを尊重する「文献資料第一主義」に対する批判であり、吉沢は「無名の庶民」の資料の欠落に対する無関心を厳しく批判する。もう1つに、「体験者・生き証人が現存している」という現代史の固有性に留意するならば、実体験を資料化したり、実体験と歴史叙述の関係を考えたりする必要があると吉沢は指摘する。

現代史研究の固有性は、「研究主体と研究対象の共有する同時代性」（吉沢1986b：5）にある。吉沢は「同時代史」としての現代史に留意し、「無名の庶民」の視点から「同時代性」について考えようとしていた。吉沢の問題関心は、戦後の歴史学に対する反省と批判に結びつく。

「私は歴史研究者の一人として反省せざるをえないが、日本の戦後の歴史学は、『日本人』の民衆レベルの戦争体験を、研究の対象として真面目に位置付けてこなかったように思われる」（吉沢1986b：245）

現在では、「民衆レベルの戦争体験」を明らかにしようとした歴史学の仕事がいくつも思い浮かぶはずである。だが、吉沢がベトナムにおける日本人の戦争体験を研究しようとした1980年代前半

では、歴史学の成果はきわめて限られていた。それは民衆の側の資料についても聞き取りについても同様であった。

戦後の歴史学を反省しつつ現代史研究の固有性を認識するということは、吉沢にとって研究者の「主体性」の問題であり、「個性」の問題であった。吉沢は「主体性」や「個性」という言葉を頻繁に使い、研究の立ち位置を確認しようとした。たとえば、澤地久枝氏の仕事と歴史研究者の仕事の相違を指摘した個所で、吉沢は両者の相違は「個々の研究者の主体性や個性」を考えるうえでヒントを与えてくれるかもしれないと述べる（吉沢1988a：179）。吉沢は、タイトルもずばりの「研究者——主体と個性」（吉沢1985b）という論文も書いている。同時代を生きる現代史研究者は、どのような「主体性」「個性」をもって研究に臨むのか、吉沢にとってそれが肝要であった。「歴史学研究は図書館の中にもあるが、しかし歴史を生きた民衆の中にも歴史学はある」（吉沢1988a：253）、これは当時の吉沢が述べた言葉であり、自らの主体性を確立しようとする方向が示されている。

（2）なぜ聞き取りに関心をもったのか

戦後の歴史学への反省と批判を意識しつつ、研究者としての「主体性」「個性」をうちたてようとした吉沢が向き合ったのは、「無名の庶民」の「戦争体験」であった。このテーマを追究しようとするとき、文献資料の問題とともに、体験者の実体験を資料化するという課題があった。先述のように、ある人の紹介から聞き取りを始めた吉沢は、しだいに責任ある地位にいた人ではなく、文字資料を残すことがほとんどなかった無名の日本人に関心を集めるようになった（吉沢1986b：6）。

聞き取りに対する向き合い方を決定づけたのは林文荘さんとの出会いであった。『私たちの中のアジアの戦争』には4人の人が登場する。その一人林文荘さんを吉沢が長崎にはじめて訪ねたのは1984年3月のこと。ベトナムで日本が行った黄麻強制栽培では現地指導員として台湾人が動員されていた。その台湾人の一人が長崎にいて難民関係の施設で通訳をしていることを知った吉沢は、聞き取りをするために長崎に向かった。

吉沢の聞き取りは、来意を告げたあとでライフ・ヒストリーを簡単に聞くことから始まる。「ベトナムからいつ引揚げられたのか」という質問に対して、林さんは「昭和54年（1979年）5月7日、ハイフォンから難民船で香港に出国しました」とこたえた（吉沢1986b：119-120）。この返答が吉沢に衝撃をもたらす。1979年5月といえば、吉沢がちょうどハノイに滞在していたときだったからである。

ハノイ滞在当時の吉沢は、東京大学出版会の『UP』に「ハノイで考える」という連載を書き送っていた。のちに東京大学出版会から単行本になった同名の本のなかで（吉沢1980）、吉沢は、時々刻々と進行する華人（華僑）の大量出国やベトナム軍のカンボジア進駐、中国軍のベトナム進攻などについて、ベトナム現代史を専攻する者の立場から書きつづっている。1980年代前半にその本を読み返しても、文字になっている限りでは大きな誤認があるとは思われないと吉沢は記している。

だが吉沢にとって衝撃だったのは、ベトナム現代史を専攻してハノイに滞在し、上記のような文章を書いていたそのときに、戦時中の日本によってベトナムに動員された台湾人が同じハノイに在住し、その人びとが難民船で出国していたことを吉沢がまったく想定していなかったことである。

吉沢は、「事件の背後に隠れていた日本の存在」（傍点一原文）にまったく気づかずに、華人・華僑問題やベトナム・中国関係について論じていたのである。林文荘さんとの出会いは、それまでの研究すべてについて再検討を迫っていると吉沢は感じた。林さんとの出会いから「衝撃」と「反省」を受けた吉沢は、「私たちの中のアジアの戦争」という文章を書き始めることを最終的に決心した。林さんとの出会いが「研究上の転換点」になった吉沢は、1984年9月、それまで勤めていた東京都立大学を辞職し、聞き取りを含めて新たな研究にとりくむことになった（吉沢1986b：121-122）。

聞き取りでは聞き手が想定していなかった思いもよらぬ話に出会うことがある。吉沢が林さんに会ったのは、まさにそうしたときだったのであろう。先に記したように、吉沢は現代史研究の固有性である「同時代性」や戦後の歴史学の反省をふまえて聞き取りを始めたと言っている。その通りであろうが、実際には林さんなどとの「衝撃」の出会いがあり、そのなかで聞き取りと正面から向き合い、同時代史研究の必要性や戦後の歴史学への反省への思いが強くなっていったのではないかと思われる。

吉沢はなぜ聞き取りに関心をもったのか。それは同時代史研究の必要性や戦後の歴史学への反省によってであるとともに、聞き取りそのものが吉沢を聞き取りの世界へと導いたといえるだろう。聞き取りと文献資料には資料としての共通性がある。いずれも聞き手（読み手）の側がどのように聞くのか（読むのか）ということに任されており、聞き手（読み手）の感度が鈍ければ聞き逃して（読み飛ばして）しまうからだ。林文荘さんの話を「衝撃」として受けとめる感度があつたればこそ、吉沢は聞き取りの世界へと導かれていったのである。だが、吉沢が導かれた聞き取りの世界は、文献資料の世界と明らかに違っていた。それは林文荘さんの話のように文献資料には書かれていない世界であり、聞き取りによってはじめて光があてられた世界であり、吉沢をはじめ歴史研究者のだれもが気づいていなかった世界であった。吉沢は文献資料とは異なる固有の意味を聞き取りに認め、聞き取りに本格的にとりくむことになったのである。

（3）聞き取りの方法

聞き取りにあたり、吉沢は関連する文献や資料を調べ、文献をたずさえて臨む。語り手に文献をすぐ見せることはしないが、その日の聞き取りを整理する際に使ったり、必要と思えば語り手に見せて記憶をたしかめたりする。

来意を告げてライフ・ヒストリーを聞くことから吉沢の聞き取りが始まる。吉沢の聞き取りの方法には2つの特徴がある（吉沢1986b：248-252）。1つは「討論」と「沈黙」である。聞き取りの方法を説明する際に吉沢は「討論」という言葉をよく使った。吉沢は語り手の話を聞くだけでなく、語り手の感想や価値観に「疑問」を投げかけたり、自分の感想や評価を「対置」させたりする。この方法には聞き取りそれ自体を成り立たなくさせる危険性があつたが、両者の「討論」によってより緊密な信頼関係が作りだされる可能性もあつた。他方で吉沢は語られなかったことについて語り手の「沈黙」を大切にすることもあつたという。「討論」と「沈黙」の境目がどこにあるのか、吉沢は明瞭に語っていないが、語り手が忘れようとしていることや沈黙していることについてはそれを大事にして文章にしなかったり、沈黙のままにしたりしたことがあつた。

第2の特徴は、聞き取りの内容を「資料」ととらえ、「資料批判」を行ったことである。吉沢は

「事実」と「資料」を区別し、聞き取りの内容は「事実」そのものではなく、1つの「資料」であり、「資料」に対しては「資料批判」が不可欠だと考えた。「資料批判」をするということは、吉沢の「歴史観と論理」で話の内容を検討することであった。

「資料批判」と第1の特徴である「討論」は密接にかかわっている。ある人の話を「資料批判」するためには、聞き手が話の内容＝資料を読み込む必要がある。聞き取りの資料は「生きた資料」(傍点—原文)にはかならず、「生きた資料」として発言する語り手に対して聞き手が積極的に応答することで「資料批判」がはじめて成り立つ。つまり吉沢は聞き取りにおける「資料批判」のためにも、語り手と聞き手の「討論」が必要だと考えたのである。

吉沢が言う聞き取りの「資料批判」は文献資料の場合にも通じることであろう。語り手と聞き手の「討論」と文献資料を読み込むことの間には、深くかかわるという点で共通点があるからである。ただし、聞き取りの場合の「資料」は「生きた資料」として発言するのであり、この点が文献資料と決定的に異なる。「生きた資料」と対峙するところに聞き取りの「真髓」があり、そこにまた聞き取りの「難しさ」もあると吉沢は述べている。

(4) 歴史叙述の方法

『私たちの中のアジアの戦争』は、聞き取りの場面や経緯などをまじえて、ベトナムにおける日本軍の戦争にかかわった4人の人生(ライフ・ヒストリー)を描いたものである。その歴史叙述は、「討論」を通じて吉沢が得た「確信」と「情報」を吉沢自身の「言葉として記録」したものであり、「討論」にこめられた吉沢の「歴史観と論理」で語り手の「人生と歴史を再構成」したものだとして吉沢は述べている。この本の「文章はあくまでも私」のものだと吉沢が言うのは、上述の意味においてである(吉沢1986b: 7・9・249-250)。

ところで、自分の「歴史観と論理」で語り手の「人生を再構成」という言い方を聞くと、あらかじめ吉沢に備わっている「歴史観」でライフ・ヒストリーを描いたように聞こえるかもしれない。たしかに語り手との「討論」などでは、吉沢が自らの「歴史観」にもとづいて「激論」を行う場面がある⁽⁴⁾。こうした場面を読むと、「討論」での吉沢は自分の歴史観を語り手に正面からぶつけており、それが「激しい議論」をもたらしたことがわかる。

だが、この本の読後感としては、吉沢が語り手に話しかける場面だけでなく、むしろ語り手の話を受けとめ、考え、反芻して自らの認識を更新していこうとする過程が強く印象に残った。とくに林文荘さんのライフ・ヒストリーを叙述した個所は、林さんの人生を描いたものであるとともに吉沢の認識の反芻・更新の過程にもなっている。吉沢はこの本の「あとがき」で、4人の方々は私にとって「教師」であったし、「研究仲間」でもあったと述懐している。話しかけたり問いかけたりする存在であるとともに学ぶ存在でもある語り手。この述懐は私の読後感とも合っているし、ここに吉沢の聞き取りの実際がよく示されているのではないだろうか。吉沢がいう「歴史観と論理」は

(4) 台南製麻の会計係になった河合さんとのあいだでは、ベトナムでの黄麻強制栽培が現金収入をもたらす契機になったと評価する河合さんに対して、吉沢は「根本的なところで疑問を感じ」、「激しい議論」が続いたという(吉沢1986b: 71)。

不変なものではなく、むしろ語り手との関係を通じて反芻・更新されるものだったとっていいだろう。

聞き取りの叙述についてはもう1点、吉沢が文献資料による叙述と区別していたことを付言しておく。すでに述べたように、聞き取りを文献資料と同列に利用することについて吉沢は「今のところ」「禁欲的」であり、作品としては「独立した方法」によるべきだと指摘していた。別々の手法で1つの対象に迫り、ある程度の成果をあげた段階で「現代史研究の方法の問題」を全体として再検討したい、これが1980年代半ばの吉沢の構想であった（吉沢1986b：8）。

（5）聞き取りから新たな研究へ

『私たちの中のアジアの戦争』に登場するのは、西原機関で電信係をしていた立花さん、台南製麻の会計係だった河合さん、大南公司の農業指導員だった林文荘さん、そしてハイフォンの憲兵だった高田さんの4人である。この4人に聞き取りを行って叙述したことにより、吉沢は次の4つの課題を新たに引き受けることになった。

1つは大東亜共栄圏の研究である。この点は台湾に生まれ、戦時中に「日本人」としてベトナムの大南公司に黄麻栽培の指導員として配属された林文荘さんとの出会いが決定的であった。大東亜共栄圏の建設のなかで植民地の人びとが動員され、支配・統治の重層的構造がつくりだされていたことを吉沢は聞き取りで強く認識する。吉沢は吉見義明と共同で『週刊朝日百科 日本の歴史119 大東亜共栄圏』（吉沢・吉見1988）を編集し、大東亜共栄圏の歴史的特質の解明をめざした。

2つ目は、ベトナムの戦時と戦後の関連についてである。1945年8月4日に日本軍はキムソン村を襲撃した。吉沢は、1993年にこの事件を扱った『ベトナムの日本軍』を『私たちの中のアジアの戦争』の続編として書いた。それは、「高田さんからの聞き取り」がキムソン村に「私を引っ張っていった」からであった（吉沢1993：60）。この本のテーマの一つがベトナムの戦時と戦後の関連であり、それを象徴するのが保安兵であった。

1945年3月9日、日本軍はそれまで共同支配者であったフランスにクーデターをおこし、インドシナ全域を日本の単独支配においた（いわゆる仏印処理）。ベトナムでは日本軍への抵抗が強まり、日本軍は反日運動の拠点であったキムソン村を襲撃した。日本軍は数名の日本軍人と1人の憲兵（高田さん）、それに5、60名の保安兵で構成されていた。保安兵は現地の若者らであったのでそう簡単に日本兵化されず、日本軍の襲撃情報が保安兵を通じてキムソン村にも流れた。保安兵の役割は日本の敗北後も残り、ベトナム戦争中もその役割が活用された。ここから吉沢は、日本軍のもとのベトナムと戦後のベトナム戦争の間にあった関連について考えるようになった。

3つ目の課題は、戦後のアジアと日本について考えることである。聞き取りを重ねる中で吉沢は、戦時中に海外に連れ出された日本兵や朝鮮・台湾出身の兵士・軍属、「従軍慰安婦」、農業指導員などが、日本の敗北後、どのような運命・選択のもとにおかれたのかを解明する課題を強く意識するようになった（たとえば、吉沢1993：56など）。もともと吉沢は、日本でアジア史を研究する者は、近代日本を相対化し、徹底して批判することが必要だと考えており（吉沢1986b：121）、日本の現状に対しても強い関心をもっていた。その吉沢にさらに問題意識の再考を迫ったのが聞き取りにほかならなかった。

たとえば先の4人のうち、3人は1954年に帰国し、1人は1980年の帰国であった。これらの人びとにとって戦後とは何であったのか。『私たちの中のアジアの戦争』の大きな特徴は、戦争体験に関する聞き取りを日本の敗北で終えずに、戦後から現在までの長い歩みまで対象にしたことにあった。その意味でこの本は日本人の戦争体験と戦後体験の双方を問うものであった。

戦後体験を問おうとした吉沢は、ほぼ同じ時期にベトナム戦争と日本とのかかわりを検討する作業を開始した(吉沢1985a・1988b・1990)。吉沢は、ベトナム戦争を通じて沖縄のなかに戦争の被害と加害の両方を考える視点が芽生えていること、だが高度成長から経済大国の時代に移行するなかで、日本人のなかに大国的なアジア意識があらわれていることに注意していた。戦争体験を問おうとした吉沢は、そこからさらに突き進んで、戦後の歴史学や戦後体験、戦後認識など、日本の戦後の総体をアジアとの関係で検討する必要性を強く意識するようになった。「過去の歴史をも抱き込んだ今日の日本社会」(吉沢1986b:244)、これが吉沢の提起した検討課題であった。

アジアと日本の戦後や同時代への問題関心、聞き取りの実践は、ベトナムや中国の社会主義における民衆のとらえ方にも連動し、国家の枠組みだけから見るのではない民衆像の把握を試みた(吉沢1987・1988c)。

以上の3つの課題を通じて吉沢は「日本人」について考えるようになった。これが4つ目である。直接には林文荘さんとの出会いがあった。台湾に生まれ、戦時中に「日本人」としてベトナムに配属された林さんは、戦後、ベトナムで「台湾人」「中国人」として生きた。1975年のサイゴン解放後、ハノイに日本大使館ができたとき、林さんは「日本人」として日本への帰国を申請したが、無国籍という理由で「日本人」としての帰国は認められなかった。林さんは「難民」としてベトナムを出国し1980年に日本に到着した。『私たちの中のアジアの戦争』では「日本人」というようにカッコがつけられている。吉沢は「日本人」という存在が自明のものではないことに気づき、そのこと自体が大きな課題だと認識するようになったのである。

「日本人」について吉沢が言及している点を2つだけ紹介する。1つに吉沢は、戦後ベトナムに残らざるをえなかった4人の「日本人」は、ベトナム民衆と結びつくことで「生きる力を取り戻すことができ」と述べている。国家の庇護のもとにおかれていた戦時中に対して、戦後の「日本人」は国家的庇護の外に置かれたことではじめてアジアの民衆とともに生きることができた。もう1つは「難民」として日本に来た林さんが、戦前の台湾での差別よりも今の日本の差別の方がきついと述べていることである。「日本人」をめぐる問いは、国家と民衆、アジアと日本、戦前・戦時と戦後・現在の関係をどのように考えるかといった課題に結びついていたのである。

2 1980年代後半における歴史学とオーラル・ヒストリー

(1) 『歴史学研究』1987年のシンポジウム

1980年代初頭からほぼ10年間にわたる吉沢南の聞き取りの実践についてまとめてみた。吉沢の聞き取りは1980年代においてどのような特徴をもっていたのだろうか。ここでは、オーラル・ヒストリーに関する『歴史学研究』の1回目の特集を参考にして、1980年代後半における、歴史学の方法としてのオーラル・ヒストリーへの関心についてまとめ、吉沢の聞き取りの実践と比較対照してみ

たい。

1回目の特集に掲載されたシンポジウムを読むと、オーラル・ヒストリーをめぐる4つの論点が出されていた（歴史学研究会1987）。1つは口述資料と文字資料の関係であり、2つ目は語り手と聞き手の関係、3つ目がオーラル・ヒストリーの固有性、4つ目が個別の聞き取りと全体史の関係である。

1つ目の文字資料と口述資料の関係について、シンポジウムに参加した中村政則は、口述資料には記憶違いがあるので前もっての準備が必要であり、口述資料は文字資料を「補完」するものだと位置づけた。これに対して松村高夫は、資料の信憑性ということでいえば口述資料だけでなく文字資料にも検証が必要であり、その点で両者は「平等」な関係にあると指摘した。

2つ目のオーラル・ヒストリーにおける聞き手と語り手の関係については、清水透が問題提起をしている。清水は、オーラル・ヒストリーによって民衆を描く場合、「対象から学び我々の価値観を豊かにするために描くのか」、「あるいは単に、こちら側の価値観で『民衆の実像』を描くのか」という2つの方法があると指摘し、清水自身は前者の立場に立つと述べた。またイギリスにおけるオーラル・ヒストリーを紹介した松村高夫は、聞き取りは語り手と聞き手の「共同作業」であり、両者の間に「学ぶ関係」がつけられると述べている。清水と松村はともに語り手と聞き手の相互関係という点にオーラル・ヒストリーの特徴を見出していたといえよう。

清水の指摘は中村政則の発言に対して述べられたものでもあった。中村は聞き取りの第1の目的は「記録をつくる」ことにあり、口述資料は文字資料を「補完」するもので検証が必要だと述べていた。中村は、「聞き書きを集める過程で、歴史を見る者の歴史意識そのものが変わっていくこともあるのではないかと」も述べていたので、語り手との関係を通じて聞き手の認識が変わる側面を認めていたが、文字資料を残すことのない「底辺民衆の歴史や生きざま」を聞き手の側が明らかにする側面、すなわち聞き手が語り手に聞く方向を中心にして聞き取りを考えていたことは間違いないだろう。同じような観点は中沢市朗の発言にもみられた。中沢は女性たちの手になる『女たちの秩父事件』（五十嵐陸子ほか1984）にふれて、聞き取りを全部使っているので何を書こうとしているのかわからなくなっている、「何を描こうとするのかという問題意識に立って聞き取りをする」ことが必要だと強調した。聞き取りについて聞き手と語り手の相互関係を重視するのか、聞き手の側の問題意識を重視するのか、両者の関係をどのように考えるのが重要な論点だったといっていだろう。

3つ目のオーラル・ヒストリーの固有性について、清水透は「普通の人々」や「日常」を理解するための有効な方法と言い、中村政則は「歴史の人間の・主体的側面」を明らかにできると述べた。最後の個別の聞き取りと全体史の関係について議論していたのは中村政則であった。中村は体験にもとづく聞き取りは、「歴史の法則とか構造、国家権力の問題を欠落させがち」と指摘した。この点に留意した中村の歴史叙述が『労働者と農民』（中村1976）であった。個別の聞き取りと全体史の関係に強い関心を寄せていたのは司会の吉沢南であった。吉沢は「個人史をいくら集めても歴史にはならない」、「素晴らしい一人の人の生き様が描かれたとしても、それが歴史学にとってどういう意味を持つかということは別問題ではないか」と述べていた。

1980年代は歴史学のなかでオーラル・ヒストリーについて議論され始めた時期にあたる。そうし

た時代の雰囲気をよく示しているのは1つ目と2つ目の論点であろう。シンポジウムにはオーラル・ヒストリーに関心をもった歴史研究者が集まったので、松村高夫のように口述資料と文字資料は「平等」な関係にあると指摘した人もいたが、文字資料への依拠を自明のこととしてきた歴史学のなかで松村のような意見はむしろ少なく、口述資料に意味を見出したとしても、文字資料の「補完」と考える人が多数だったように思われる。この時代における聞き取りの焦点は信憑性にあったのである。したがって、語り手と聞き手の関係についても、聞き手の側が問題意識や検証を忘れずに話しを聞くことが重要（当然）だとする考えが多数であり、語り手の話しから学んだり語り手と聞き手が共同作業をしたりするという考えはまれであった。

(2) 1980年代における吉沢南の聞き取りの特徴

こうした時代状況をふまえるとき、吉沢南の聞き取りは、語り手を「生きる資料」と位置づけたところに大きな特徴があったことがよくわかる。聞き取りは文字資料と異なり、語り手と対面で接するものであった。吉沢は「生きる資料」である語り手と徹底して討論を行った。討論は「生きる資料」である語り手との関係を緊密にするためであり、資料批判を行うためであった。相互関係をいっそう緊密にしようとした討論という方法。ここに吉沢の聞き取りの最大の特徴があったといっていだろう。

吉沢の本では聞き取りの方法として「討論」が強調されているが、先にも述べたように、吉沢は語り手に意見を言うだけでなく、語り手の話を受けとめ、反芻して自らの歴史観を問い直そうとしていた。「生きる資料」としての語り手と吉沢の関係は、討論も含めて相互規定的で往復的だった。語り手との相互的関係を重視した歴史研究者、これが1980年代における吉沢の特徴だったといっていだろう。

吉沢は聞き取りを通じて現代史研究、とりわけ同時代史研究の必要性を強く意識するようになる。吉沢が研究対象にした現代史は研究主体と研究対象が共存する。吉沢は、現代認識＝同時代認識を問い直し、自らの研究方法を再検討し、さらには日本とアジアの現在を再考しようとした。同時代史の再認識へと結びつく聞き取り、ここにも吉沢の特徴があった。

聞き取りに積極的な意味を見だし、討論を実践していたことからすれば、吉沢が口述資料を文字資料の「補完」と考えていなかったことは間違いないであろう。1980年代の歴史研究者のなかではまれな認識だったように思う。当時の吉沢がもっとも悩んでいたのは、口述資料と文字資料の関連をふまえた現代史研究の方法についてであり、個別の聞き取りと全体史の関係であった。

3 2000年代における歴史学とオーラル・ヒストリー

1980年代からおよそ20年がすぎた2000年代において、歴史学ではいわゆる民衆を対象にしたオーラル・ヒストリーをどのように位置づけるようになったのか。歴史学研究会が2005年4月3日に開催したシンポジウム〈方法としての「オーラル・ヒストリー」再考〉を題材にして、この点を考えてみよう。

シンポジウムでは、第1セッション「オーラル・ヒストリーへの接近」として、桜井厚「オーラ

ル・ヒストリーの対話性と社会性」、清水透「フィールドワークと歴史学」の2本の報告があり、私が「歴史学からの接近、歴史学への接近」と題するコメントを行った。ついで第2セッション「オーラル・ヒストリーの実践」として、姜徳相「インタビューとアーカイヴ問題」、前川佳遠理「オーラル・ヒストリーの実践」、中尾知代「響きあう声：オーラル・ヒストリーの可能性」の3本の報告が行われ、中野聡が「戦争史とオーラル・ヒストリアン」と題したコメントを行った（歴史学研究会2006a・2006b）。

当日、私は各報告をふまえ、3つコメントをした（大門2006）。第1は文字資料と口述資料の位置づけについてであり、歴史学における安丸良夫の議論を援用しながら（安丸1996）、聞き取りによる認識は、(1)口述資料とそこから導きだされる「事実」、(2)現実世界の全体性、(3)<私>（聞き手）の内面性、の3つに拘束されると整理した。文字資料による歴史認識と聞き取りの認識をくらべた場合、(1)と(3)の関係は直接的であり、(1)の口述資料は(2)(3)をふまえた聞き取りのなかで作成される。文字資料はすでに書かれたものであり、口述資料は聞き取ったものという相違はあるが、以上の整理からすれば、両者は現実世界や<私>の内面をふまえて選択する（聞き取る）点で共通している。文字資料と口述資料のあいだに決定的な相違があるわけではなく、むしろ共通性が基本だとコメントをした。

聞き取りには文字資料と同様に「事実」を確認しようとする側面がある。たとえば第2セッションで、インドネシア人兵補から聞き取りを行った前川佳遠理の報告や、イギリス軍で日本の捕虜になった人びとから聞き取りをした中尾知代の報告を聞くと、聞き取りには文字資料が決定的に足りない領域での「事実」の確認という側面があることがよくわかる。ただし、その場合にも2人の報告者が期せずして強調していたように、戦争という非日常の状況であればあるほど、口述資料をそのまま「事実」と判断することはできず、文字資料と同様な検証が必要となる。

文字資料と異なる口述資料の特徴については2つ指摘をした。1つは、(1)と(3)の関係、すなわち聞き手と語り手の関係が直接的なことである。当日の報告者の1人でライフストーリー・インタビューを長いこと行ってきた桜井厚は、語りは語り手の経験の物語であるが、インタビュアーとの対話によって成り立つものであり、インタビューの現在に拘束されて「相互的に構築」されるものだという（桜井2005）。桜井の実践は、先の(1)(2)(3)の位置づけとほぼ同じであり、桜井の描くライフストーリーと歴史研究は共通性が多い。

聞き手と語り手の関係については、保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』（2004）が大事な示唆を与えてくれる。保莉は、歴史経験は多元的であり、追体験は不可能だということを認めたいうえで、(1)と(3)の「接続可能性」「共奏可能性」に注目し、(1)(2)(3)の多元的・往復的な実践を通じて「アボリジニの歴史実践」を描こうとする。保莉は、(1)と(3)の関係性、つまり聞き手と語り手の関係に最大の留意を払う。口述資料は関係性のなかでこそつくられると考える保莉は、「誰が歴史家なのか」という厳しい問いを歴史学に投げかける。保莉の実践は当日の報告者である清水透のフィールドワークや桜井厚のインタビューに共通する面が多く、聞き取りによる叙述には、文字資料にもとづく叙述とは異なる可能性が開かれている。

口述資料のもう1つの特徴は、文字資料に依拠した歴史研究に含まれる問題点を浮き彫りにする面があることである。この点については私の聞き取りの例を紹介した。自分自身の聞き取りを振り

返る機会を与えられた私は、そこから文字資料の読み直しを迫られ、文字資料に書かれていることだけでなく、書かれていないことを考えることになった。あるいはまた、文字資料を残す人は男性が多く、女性の残した口述資料と文字資料のジェンダー関係をどのように考えるべきか、といった問題にたどりついた（大門2004）。

コメントの第2は、聞き取りと歴史の全体性との関連についてである。私は、歴史研究はたとえば日本近代とは何かという全体性にかかわる問いを含めて研究すべきだと考えているが、これは文字資料による歴史研究だけでなく、聞き取りについてもあてはまる。ただし、その接続のために必要なことは、予定された歴史の全体性に聞き取りをあてはめるのではなく、聞き取りの側から歴史の全体性を構想するような営為、あるいは聞き取りを通じて歴史の全体性の仮説をたえず見直すような営為だと思われる。そこで構想される歴史の全体性は、今までの常識的なものではなく、保莉のいう聞き手と語り手の多角的・往復的な実践を含むものになるのではないか。私はオーラル・ヒストリーについて聞き取りを通じた歴史実践と呼んだ。聞き手と語り手の多角的・往復的な実践、さらには歴史の全体性との接続を含むという意味である。新しい歴史の全体性の表現は容易でないが、私はオーラル・ヒストリーに含まれる可能性に注目したいと述べた。

コメントの第3は現在という時代にかかわる。文字資料による歴史研究もオーラル・ヒストリーによる歴史実践も、今を生きる人間が過去を問おうとする点で共通する面がある。今を生きる人間が現実世界の全体性に対してどのような緊張感をもつのか、そのことが歴史研究の存在意義に大きくかわる。文字資料の選択および口述資料の聞き取りが現実世界の全体性に拘束されているというのはそのような意味においてであり、この拘束が弱くなれば、選択（聞き取り）にもとづく歴史研究はそれだけ説得力が乏しくなる。歴史研究は現実世界の全体性への感度がたえず求められているのであり、この点は文字資料も口述資料も共通である。

以上が当日の私のコメントである。

シンポジウムの内容が掲載された『歴史学研究』については、近藤和彦が『史学雑誌』の「回顧と展望」でコメントを4つ寄せている（近藤2007）。①「聞き取りの有用性」は「誰にも否定できない」、②「文字になった記録が客観的／事実」であり、「口述は主観的／物語だ」という「二分法をとる研究者は今ではないのではないか」、「どちらも意味と目的のこめられた発話」であり、「性格の違う別の資料のクロスレファレンス」でくりかえし確認する必要がある、③「語り手と聴き手の相互作用」は「微妙な問題」である、④「インドネシア兵補をめぐる語りと歴史体験」についての前川佳遠理の発言、「聴くというよりもキーワードを言ってくれるように誘導している質問が多くて……」（歴史学研究会2006b）という指摘には、「厳粛な気持ちにさせられた」。

近藤のコメントと私の当日のコメントには共通点が多い。聞き取りの有用性については、私のコメントでも前提になっている。文字資料と口述資料の関係について、1980年代には文字資料を主と位置づけ、口述資料を補完とみなす考えが多く、両者を同じ資料として「平等」とする考えは少数であったが、2000年代においては、文字資料と口述資料を二分法でとらえたり、文字資料を単純に主とみなしたりする考えは少なくなった。1980年代と2000年代のあいだには、1990年代における歴史認識や歴史資料をめぐる議論があり、この間の歴史認識の深化がオーラル・ヒストリーをめぐる

議論にも反映したとっていいだろう⁽⁵⁾。

吉沢南の仕事をつとめ、さらに2005年のシンポジウムを振り返った現在、オーラル・ヒストリーにとって議論すべき課題は、聞き手と語り手の関係及び叙述の方法の2つに集約されるのではないかと思う。聞き手と語り手の関係は、近藤和彦が言うようにたしかに「微妙な問題」であるが、両者の関係はそれぞれの聞き取りによって異なるはずである。両者の関係を含めて口述資料を検証するためには、聞き手の人数や聞き取り回数などの条件とともに、質問項目を聞くのか、討論するのか、話しに耳を傾けるのか、それらの複合なのかといった聞き取りのスタイルなど、それぞれの聞き取りの方法を自覚して明示することが必要であろう。討論をするという吉沢の方法は聞き取りの1つの方法であり、それ以外の方法があってももちろんいいはずである。

聞き手と語り手の関係をさらに考えてみれば、語り手の世界を明らかにしようとする過程と、それを受けて聞き手の側の認識が反芻・更新される過程の2つに整理できる。聞き取りという行為はこの2つの過程が繰り返されるものであり、聞き手と語り手の関係が相互的だとか往復的だとかいうのは、このような過程を指しているのだと思われる。

聞き取りの叙述として最終的に求められることは、聞き手と語り手に関する以上の事柄が含まれていることなのではないかと思う。とくに聞き手と語り手が対面する聞き取りの特徴をふまえれば、語り手の世界を叙述するだけでなく、聞き手の側の認識の過程を叙述することが不可欠だと私は考える。語り手の世界と聞き手の認識の両者がそろうことで、はじめて聞き取りという固有の行為を表現できるのではないか。吉沢南は自分の聞き取り方法を「討論」に集約させて説明したが、先述のように、吉沢の本の読後感としては「討論」だけでなく、吉沢自身の認識の変化が丁寧にとどられている。そこにこそ『私たちの中のアジアの戦争』の魅力があるのだと思う。

私自身は現在、ある時期まで行っていた、語り手のライフストーリーにそって話しを聞くという方法を意識的に崩し、語り手の話にできるだけ耳を傾けることを心がけている。語り手の話が仮に同じ内容にもどったとしても、それをただすことはせず、語り手の話に耳を傾ける。この聞き取り方法は、ある農村女性への聞き取りの失敗から学んだことであり、ライフストーリーの節目がはっきりしている男性と節目が必ずしもはっきりしていない女性に対して、同じ聞き取りの方法でいいのかという反省にもとづく（大門2004・2007）。あるいはライフストーリーを聞くという方法は、語り手の人生の基礎的情報を知るうえで有用であるが、他面でモデルストーリーへと誘導して語り手の話を制約する面がある。だれにどのような方法で話を聞くのか、聞き取りには多様な方法がありうる。語り手と聞き手（私）の関係を自覚して明示すること、そして聞き手の側の認識を示すこと、このことが聞き取りを意味あるものにするように思われる。

おわりに

吉沢南の『私たちの中のアジアの戦争』をはじめて読んだのはいつのことだったのか、今となってははっきりしない。語り手と討論し、ときには激論にもなるという吉沢の聞き取り方法に驚いた

(5) 1990年代における歴史認識をめぐる議論については、（大門1999・2001）を参照されたい。

ことはよく覚えている。このような聞き取りの方法もあるのかというのが率直な感想であった。

そのころの私は、吉沢の聞き取りをどのように受けとめたいのかよくわからなかったが、吉沢の仕事を振り返り、歴史学とオーラル・ヒストリーのかかわりを再検討したいまでであれば、吉沢の試みの意味がよくわかる。戦争体験の聞き取りがまだ乏しかった1980年代にあって、吉沢は日本人の戦争体験を検討する必要性から手さぐりで聞き取りを始め、聞き取りを歴史学の方法にすべく苦闘していた。語り手とのあいだで真剣な討論を重ねるといった聞き取りの方法を見出した吉沢は、聞き取りに導かれるなかで大東亜共栄圏、ベトナム史における戦時と戦後、戦後のアジアと日本、「日本人」など、新たな課題を発見していった。そこから吉沢は、アジアと日本の戦争を現在にまでわたって研究するという大きな課題を自らに課した。吉沢は同時代や主体性という言葉を好んだ。研究主体と研究対象が共存する同時代にあって、聞き取りは同時代を生きる吉沢が自己の研究の主体性を確立するうえで欠かせない方法としてしだいに認識されていった。

『私たちの中のアジアの戦争』は、4人のライフストーリーを記述した最後にまとめの「おわりに」をおいたものである。アジアと日本の戦争という大きな主題や、文字資料と口述資料の双方の検討をふまえて現代史研究の方法を考えるという吉沢の構想からすれば、聞き取りに関する仕事は道半ばで途絶えている。だが、この本が魅力的なのは、語り手と徹底して討論をした吉沢が、語り手の提起した課題を受けとめ、自らの歴史観を問い直そうとしているからだ。ここでは歴史研究者の作業過程が洗いざらい出されている。4人のライフストーリーを描くとともに、自分の歴史認識の変化をたどった本、それが『私たちの中のアジアの戦争』である。

吉沢が提起した課題には、1990年代の歴史認識論争を先取りしたものが含まれていた。アジアにおける日本の戦争と戦争体験を問うことや「日本人」とは何かを問うこと、これらはいずれも1990年代の歴史認識論争を通じて明確になった課題であった。

私自身は、オーラル・ヒストリーにはさまざまな方法があってよいと考えている。それは、いわゆる民衆に聞き取りをする場合でも同様であり、聞き手の側がどのような方法で聞き取りをするのかを自覚して明示すれば、オーラル・ヒストリーには多様な方法がありうる。そのことを認めたくえで、吉沢南の仕事振り返ってきたいと思うことは、語り手の話を聞くだけでなく、聞き手の側が語り手の話を受けとめ、そこから生じた聞き手の歴史認識の変化を自覚して叙述すること、語り手と聞き手の往復関係を叙述することのうちに、歴史学の方法としてのオーラル・ヒストリーの可能性があるように思われる。他者認識であって同時に自己認識でもあるような聞き取りの方法であり、吉沢の仕事はまさにこの点を追究したものであった。2005年の歴史学研究会シンポジウムでの私のコメントを紹介したように、聞き取りにおける歴史認識とは、今を生きる人間が過去を問おうとするものである。聞き手も語り手も現実世界の全体性に規定されながら過去を問おうとする。語り手はどのような現実世界に規定されて語っているのか、聞き手はどのような現実世界と私の内面性に規定されて聞き取っているのか、語り手と聞き手の往復関係とはこのような問いを重ねることであり、今を生きる人間の歴史意識を明らかにするところに聞き取りという歴史実践の固有性があるように思われる。

吉沢には聞いてみたいことがたくさんある。たとえば吉沢が聞き取りをした人はいずれも戦争を体験した男性であった。そのことと討論という聞き取り方法はかかわりが無いのだろうか。仮に女

性に聞き取りをする場合にも吉沢は同じ方法をとったのであろうか。戦争体験とジェンダーという課題が残されているように思う⁽⁶⁾。

吉沢南は2003年に亡くなった。吉沢に直接話を聞くことはできないが、吉沢に尋ねたかったことは私たちが引き継ぐべき課題として私たちの前にある。

（おおかど・まさかつ 横浜国立大学経済学部教授）

【参考文献】

- 青山和夫編，2003「吉沢南教授 略歴・業績」茨城大学人文学部紀要『人文学科論集』第39号
- 五十嵐睦子ほか，1984『女たちの秩父事件』新人物往来社
- 大門正克，1999「歴史意識の現在を問う——1990年代の日本近代史研究をめぐって」『日本史研究』第440号
- 大門正克，2001「日本近代史研究における1990年代」『歴史評論』第618号
- 大門正克，2004「聞こえてきた声，そして『聞きえなかった声』」『歴史評論』第648号
- 大門正克，2006「歴史学からの接近，歴史学への接近」『歴史学研究』第811号
- 大門正克，2007「昭和初期 山梨の女性たち——聞き取りの経験から」山梨県立大学地域研究交流センター『2006年度研究報告書 やまなし地域女性史プロジェクト』
- 笠原十九司，1988「歴史学研究と口述史料」歴史学研究会編『オーラル・ヒストリーと体験史——本多勝一の仕事をめぐって』青木書店
- 近藤和彦，2007「2006年の歴史学界 総説」『史学雑誌』第116編第5号
- 桜井厚，2005『境界文化のライフストーリー』せりか書房
- 中村政則，1976『労働者と農民』小学館
- 保莉実，2004『ラディカル・オーラル・ヒストリー』御茶の水書房
- 安丸良夫，1996『＜方法＞としての思想史』校倉書房
- 吉沢南，1980『ハノイで考える』東京大学出版会
- 吉沢南，1984～1986「私たちの中のアジアの戦争——日本とベトナムのあいだ」東京大学出版会『U P』第141号～第161号
- 吉沢南，1984「ハノイにおける西原機関——1940年7月」東京都立大学人文学会『人文学報』第167号
- 吉沢南，1985a「世界の中の日本と民衆の対外意識」金原左門編『戦後史の焦点』有斐閣
- 吉沢南，1985b「研究者——主体と個性」歴史学研究会編『講座日本歴史13』東京大学出版会
- 吉沢南，1986a『戦争拡大の構図——日本軍の「仏印進駐」』青木書店
- 吉沢南，1986b『私たちの中のアジアの戦争——仏領インドシナの「日本人」』朝日新聞社
- 吉沢南，1987『個（わたし）と共同性（わたしたち）——アジアの社会主義』東京大学出版会

(6) 吉沢が聞き取りをした4人のうち、1954年に帰国した3人は、いずれもベトナム女性と家庭を持ったが、3人とも妻と子どもをベトナムに残してきた。そのことについて吉沢は、「やむをえなかった措置」と書きとめている（吉沢1986b：243）。吉沢はこのことについて、大きく変わった日本への十余年ぶりの帰国であり、しかも戦争最中のベトナムにいて日本の情報がまったく入手できなかったからだとして述べているが、私にはなぜ吉沢があえて「やむをえなかった」と書いたのか、釈然としない気持ちが残る。男性ではなく女性の場合、あるいは日本から引揚げる外国人の場合（たとえば米軍基地にきたアメリカ兵の場合）などについて、吉沢はどのように考えていたのだろうか。

- 吉沢南, 1988a「あとがきにかえて」歴史学研究会編『事実の検証とオーラル・ヒストリー——澤地久枝の仕事をめぐって』青木書店
- 吉沢南, 1988b『ベトナム戦争と日本』岩波ブックレット
- 吉沢南, 1988c「歴史学の対象としての『同時代』」東京大学出版会『UP』第183号
- 吉沢南・吉見義明共編, 1988『週刊朝日百科 日本の歴史119 大東亜共栄圏』朝日新聞社
- 吉沢南, 1990「ベトナム戦争と日韓会談」歴史学研究会編『日本同時代史』第4巻, 青木書店
- 吉沢南, 1993『ベトナムの日本軍——キムソン村襲撃事件』岩波ブックレット
- 吉沢南, 1999『ベトナム戦争——民衆にとっての戦場』吉川弘文館
- 吉田裕, 1988「日本近代史研究とオーラル・ヒストリー」歴史学研究会編『オーラル・ヒストリーと体験史——本多勝一の仕事をめぐって』青木書店
- 歴史学研究会, 1987「シンポジウム オーラル・ヒストリー」『歴史学研究』第568号
- 歴史学研究会, 2006a「小特集 方法としての『オーラル・ヒストリー』再考——オーラル・ヒストリーへの接近」『歴史学研究』第811号
- 歴史学研究会, 2006b「小特集 方法としての『オーラル・ヒストリー』再考——オーラル・ヒストリーの実践」『歴史学研究』第813号
- 歴史学研究会編, 1988a『オーラル・ヒストリーと体験史——本多勝一の仕事をめぐって』青木書店
- 歴史学研究会編, 1988b『事実の検証とオーラル・ヒストリー——澤地久枝の仕事をめぐって』青木書店

<p>【協調会史料】 法政大学大原社会問題研究所 監修 協調会研究会(梅田俊英・高橋彦博・横関至) 編</p>	<p>■戦前・戦中の労働者、都市生活の実態が明らかに 『産業福利』復刻版【第二回配本】 付「災害予防ポスター集」</p>	<p>産業福利協会が一九二六年に創刊し、以後発行主体を変えながらも九年間にわたり刊行された月刊誌を全三回配本で完全復刻。昭和初期から戦時にかけての労働災害および草創期の安全衛生運動の実態を継続的に把握でき、現代の防災問題への貴重な示唆を与えうる基礎史料。第二回配本は一九二七～三三年の全号に加え、産業福利協会発行『災害予防ポスター集』(一九一九年)をオールカラーで復刻。</p>	<p>■大原社研が保管する膨大な協調会基幹史料を公開 日本社会労働運動資料集成Ⅰ・Ⅱ (マイクロフィルム版) Ⅰ 労働課 情報課保存版、一九二〇～三〇年代、全一、一四リール 揃2,730,000円 Ⅱ 一九三一～四〇年、全62リール 揃1,575,000円</p>	<p>■歴史的価値の高い精密な生活実態調査の記録 都市・農村生活調査資料集成Ⅰ・Ⅱ Ⅰ A5判上製 全12巻 総4,760頁 揃2,622,500円 Ⅱ A5判上製 全12巻 総6,080頁 揃2,662,500円</p>	<p>■社会労働運動史の定説を覆す、再評価の試み 協調会の研究 法政大学大原社会問題研究所 編 梅田俊英・高橋彦博・横関至 著 A5判上製 388頁 5,460円</p>	<p>■両機関の営みに共通する地下水脈を探索する 戦間期日本の社会研究センター 大原社研と協調会 高橋彦博 著 A5判上製 364頁 6,090円</p>
---	---	---	--	---	---	---

柏書房 〒113-0021 東京都文京区本駒込 1-13-14 TEL.03-3947-8251 FAX.03-3947-8255 <価格税込>
<http://www.kashiwashobo.co.jp>